

9-1 呑川と文芸作品

小関智弘の『大森界限職人往来』(朝日新聞社)という本に、その名もずばり「呑川」という詩が紹介されている。

呑川
くろい川——
——呑川
重油のよどみ
陽のひかり底までゆかず
さざなみの反射もみせぬ
のり
海苔採りの舟をうかべ
とめづなの杭は くの字にうつり
川底から ゆらりと生えた
くらげの足か

小関の友人が書いたこの詩はまだ続くのだが、いろいろな意味でかつての呑川を象徴している。まず詩が発表されたのが昭和 34 年発行の同人誌『塩分』であること。昭和 34 年には呑川は「くろい川」で「重油がよどみ」「陽が底まで」届かないような汚れた川になっていたのだ。

小関自身がこの本で「数年前までは子どもが泳ぎ、ハゼが釣れた」ほどきれいだったが、「わたしが東一製作所に勤めた昭和三十二年には、すでに川の汚れがひどくて、干潮時には黒光りする汚泥から発散する悪臭が工場のなかにまで匂っていて」と書いているように、昭和 30 年代前半の高度経済成長が呑川を「死の川」に落としめたことは間違いない。

第 2 節の「海苔採りの舟をうかべ」も興味深

い記述だ。「大森、羽田沿岸の海苔業者が漁業権を放棄したのは、わたしがまだ呑川のほとりの小さな工場にいる昭和三十八年だった」とこの本にある。

漁業権を放棄するほどだから、その数年前には工場や家庭からの汚水が海を汚し、海苔を採る環境ではなかっただろう。そう考えると、呑川にかんがえていた「海苔採りの舟」はもはや現役ではなく、役目を終えて静かに朽ち果てようとしていたのではないだろうか。

小関の『大森界限職人往来』にはこのように頻繁に「呑川」という言葉が出てくるうえ、町工場で働く労働者の様子が会話も交えてじつにいきいきと描かれている。次の文章はまるで映画『男はつらいよ』に出てくる一場面のような。小関が呑川の堤防に腰を下ろして、つかの間の昼休みを楽しんでいたときの話である。

対岸にピアノ工場があって、揃いの作業服を着た女工が散歩をする。キャッチボールをしていた青年がわざとボールを女工にぶつけて、黄色い悲鳴が川岸にはずむ。女工のひとりが、そのボールを川に捨てると、青年たちは岸に舫った海苔採りの舟に飛びおり、長い竹竿の先につけたたも網で、流れるボールを追う。ボールをぶつけられた女工も、ボールを捨てた女工も心配そうに堤防から体をのり出して眺めている。

「……くれるじゃんかよお」

「そつたらこと……」

大田区の町工場にはたくさんの地方出身の人たちが、男も女も働いていたことが方言を通して伝わってくる。呑川がほとりで働く人々と断絶していたわけではないことも伝わってくる。

それにしても、この本からわかるのは、日本の縮図とも言える大田区がたどってきた道筋だ。

漁業で栄えた大元の川を汚したのが町工場。その町工場には多くの地方出身の人も含めて労働者が働いていた。近くには多くのアパートが建てられ、その中には海苔業者が放棄した漁業権で得た大金で作ったものもあった。しかしアパートと隣接する町工場は騒音などから「公害の元凶」と指弾され、埋め立て地の工場団地への移転を余儀なくされた。

第一次産業から第二次産業へ、そして第二次産業の町工場も呑川のほとりからは消えつつある。今では川に汚水は流れなくなったが、上にあげたような労働者と川との触れ合いも見られなくなったように思える。

次に呑川のほとりのアパートに居を構えた女性詩人のエッセイがある。詩人の名は石垣りん。銀行員として定年まで勤務するかたわら、詩を作りつづけ、詩集『表札など』に収められた「シジミ」「くらし」などの詩で知られている。人が生きていくうえでのやりきれなさや悲しみを、わかりやすい言葉で綴った詩人である。

彼女が『焔に手をかざして』（筑摩書房）というエッセイ集の冒頭に収めたのが、「呑川のほとり」だ。少し長くなるが、引用してみる。

あと五、六年もすれば会社をやめなければならぬ、という年の暮れ。そこに建つはずのアパートの絵図をたよりに、夕暮れの建築現場を見に行った。風をつめたい日で、ついてきた下の弟が「お姉ちゃん、さびしい所だね」といった。（中略）

大田区南雪谷一丁目、退職金で完済できるか

どうかの瀬戸際にたつはずのスミカであり、榎山へゆくおりんばあさんを思えば、町名の雪谷はりんがたどりつくに恰好の場所かも知れなかった。（中略）

アパートの横を流れる川を呑川といい、引越して来た当初はよく氾濫した。その水位のあがりさがりを、夜通しとっては嘘になるが、三階の窓から目をこらして見ていたこともある。治水工事がどうやら完了したのはついこの間のこと。川幅を少しひろげ、川底までもコンクリートで固められると、この春、水の満干で、干の部分にべったり桜の花びらが張りついていたりした。

定年退職したのが1975年なので、石垣りんが呑川のほとりに引っ越してきたのは70年ということになる。その頃も呑川は「よく氾濫し」、このエッセイを書いた76年夏の少し前に「川底までもコンクリートで固められ」たことがわかる。久が原に住んでいて呑川を毎日通学路にしていた私には少し意外な気もするのだが、場所によって違いがあったのかもしれない。

さらに石垣りんは「川をはさんで東雪谷、南雪谷に別れる。川を左手に見て、私の部屋からはちょうど同じ高さに、池上線の電車が土手の上を走っている。人間の頭数が、混んでいなければ数えられる近さである」と書く。

ただアパートといっても、このエッセイでは16階建てで世帯数が95と書いているから、今でいうマンションだろう。雪が谷大塚駅と石川台駅の間を走る池上線の走行音が伝わるような、呑川のほとりに、詩人は亡くなるまで住みつけた。どんな思いで石垣りんは毎日呑川をながめていたのか、知りたくなる。

ノンフィクション、エッセイと見てきたので、最後は小説のなかで呑川が取り上げられたものを紹介したい。

松本清張の『砂の器』は映画版では、犯人が返り血を浴びた白いスポーツシャツを「この辺りのどぶ川にだって捨てることができる」として呑川がちらりと出てくる。ただし、小説には出てこない。佐藤正午の『ジャンプ』では、失踪する恋人が住んでいたマンションの目の前を呑川が流れている、という設定になっている。

ともに共通するのは「蒲田」という町が、起こる事件の舞台に選ばれている点だ。『砂の器』では、被害者の元巡査が死体で発見されたのが蒲田操車場。犯人は操車場にとまっている電車の車輪の下に死体を置き、顔を仰向けに寝せて、電車が動き出したら顔が潰れるように細工している。元巡査の身元がばれないように、操車場がある蒲田を犯行の舞台に選んだわけである。

『ジャンプ』の場合は、主人公が翌日の札幌への出張に「近くて便利」だという理由で、恋人が住む蒲田のマンションに泊めてもらう、という設定になっている。わざわざ主人公が泊まりに来た日に失踪しなくてもいいだろうし、そもそも一人暮らしの女性が蒲田のマンションに住むと思うだろうか、という疑問は残る。蒲田、という都会のうらぶれた街並みと「失踪」というテーマが共鳴する、と作家は考えたのかもしれない。

以上の2編同様、絲山秋子の『イツ・オンリー・トーク』という短編小説も舞台が蒲田である。まるで呑川を小説に登場させるのなら蒲田しかない、と作家が思い込んでいるようだが、逆にそれだけ蒲田という町が小説の舞台にはま

りやすい、ともいえるだろう。

この『イツ・オンリー・トーク』では作家の絲山秋子が主人公の橘優子に、なにくれとなく蒲田の魅力を語らせている。なにしろ小説の書き出しが「直感で蒲田に住むことにした」である。中ほどに、こんな会話が出てくる。

「ああ、いい街ですね、蒲田。ちょっと歩いただけけど」

「でしょ。なあんか、懐かしいみたいな感じするよね」

「どことなく猥雑で小汚くて」

「そうそう『粹』がない下町なの」

大田区民としてはこそばゆい気分になるが、確かに蒲田は同じ下町でも、浅草のような『粹』がないことは合点が行く。

そして小説の後半に呑川はこのように登場する。

「鬱のときはさ、呑川んどこ歩くのよ」

うちのすぐ裏だ。汚い川だ。それでも少し涼しい風が吹く。秋の虫が闇を覆うように鳴いている。

「へっ、なんで？」

「真っ黒だから」

「川が？」

「うん」

また呑川は「汚い川」と決めつけられてしまった。しかし蒲田を舞台にしているから、仕方がないともいえる。実際に馬引橋からJR鉄道橋のあたりはゴミが浮かんでいることが多い。それにしても「鬱のときは呑川を歩く」とは。気

分がどんよりしているときに寄り添ってくれる川、と好意的に解釈したい。

この小説、ある意味で蒲田小説ともいえるもので、蒲田を知る人には「ああ、あそこか」というような描写がたくさん出てくる。

主人公がネットで出会った男と痴漢プレイをするのは「ヨーカドーの上の古ぼけた映画館」（さすがに固有名詞は出ていないが、どうみてもテアトル蒲田である）。「タイヤ公園」は主人公と知り合いのやくざが幼稚園の頃、卒園遠足で行った場所で、「自分の最初の思い出なのだ」と言う。自殺しかけて主人公のアパートに転がりこんだいところは、政治家の事務所に詰めて「区内全域走り回った」。

他の登場人物たちは、蒲田の具体的な場所でも実存的な意味を見いだしているのに、精神的に不安定な主人公だけは蒲田の街をふわりふわりとさまよっている印象だ。そんな彼女が唯一実存的な意味を見いだしているのが、先に挙げたように「真っ黒」な呑川、なのである。

単に蒲田の添えものとして呑川が登場しているのではない、と私には思える。呑川がきれいになることは望みたい一方、粹でない蒲田という街並みにふさわしいのは「汚い」呑川で、だからこそ疲れた人の心を癒しているのではないだろうか。